

新羅淨土教家の大經「胎化段」觀

渡 辺 顯 正

一

康僧鑑三藏訳と伝えられる『無量寿經』卷下の經末における
釈迦の發遣（「仏告弥勒菩薩諸天人等無量寿国声聞菩薩功德智慧
不可称説又其国土微妙安樂……（乃至）……十方世界無量仏国其往
生者亦復如是甚多無數我但説十方諸仏名号及菩薩比丘生彼国者晝夜
一劫尚未能竟（盡）我今為汝略説之耳」）を説かれる中、釈迦仏
の勸誠を挙げて、初めに「誠惡」を説かれている。

その中において、（一）諸惡の誡め（悲化段・三毒段）淨穢欣厭、
（二）弥勒の領解、（三）釈尊の重誨、（四）五善五惡の勸誠を懇切に説
かれてある。

次に、「仏告阿難起更整衣服合掌恭敬礼無量寿仏」
以下は、第二に「誠疑」を説かれるのである。

その中、はじめに、（一）弥勒の光照、次いで、（二）胎生と化
生、（三）信疑の得失、（四）胎宮の喩説、（五）十方の来生を挙げられ
るのである。

釈尊は、その第二の「誠疑」を説かれる中において、阿難
及び特に補処の慈氏菩薩（弥勒菩薩）を対告衆として、胎生と
化生、信疑の得失、胎宮の喩説を委しく説かれるところが所
謂「胎化段」である。

この胎化段は、經末に挙げられてはあるが、既に『無量寿
經』卷下のはじめ「三輩の不同」を説かれる中、その下輩に
おいて、「仏告阿難其下輩者十方世界諸天人民其有不至心
欲生彼国假使不能作諸功德當發無上菩提之心一向專
意乃至十念念無量寿仏願生其国若聞深法歡喜
信樂不生疑惑乃至一念……」等と、「不生疑惑」と説かれ
るところに、既に經末における胎化の得失を引起する発端の
深意が窺われるのである。

さらに、「釈尊の重誨」をあらわす中、「今我於此世作仏
演説經法宣布道教断諸疑網」等と説かれるところに
も、胎化の得失についての釈尊の勸誠の仏意が重ねて窺われ
るのである。

今この「胎化段」について、新羅の浄土教家（とくに元曉・憬興の二師）は、その経意を如何にみられるのであろうか、その見解を探究してみたいと思うのである。

二

はじめに、元曉師（617～686）は、その著『両卷無量寿経宗要』（大正藏經三十七卷・淨全五卷）において、胎生と化生を明かすところの「彼国人民有胎生者汝復見不對曰已見其胎生者所処宮殿或百由旬或五百由旬各於其中受諸快樂如切利天上亦皆自然」（明見胎生者この釈意は述べられていない。このことは、無量寿経の宗要を解明するためであらうか。しかしながら、五智（仏智・不思議智・不可称智・大乘広智・無等無倫最上勝智）の釈については、次の如く詳しくのべられてある。

次明有_レ四疑惑衆生_二於_レ中先明_二所疑境界_一然後顯_二其疑惑之相_一所疑境界者如_二下文言_一若有衆生以疑惑心修諸功德願生彼国不_レ了佛智・不思議智・不可称智・大乘広智・無等無倫最上勝智於_二此諸智疑惑不信然猶信_三罪福_一修習善本願生彼国此諸衆生生彼宮殿五百歲中不聞三宝故說_二辺地_一乃至広説（大正藏經三十七卷一三〇頁）

と述べて、仏智を総標の句とし、下の四句を別して四智を顯わすものとして、五智について総別を分けるのである。別し

て四智を顯わす中、不思議智を成所作智とし、不可称智を妙觀察智とし、大乘広智を平等性智とし、無等無倫最上勝智を大円鏡智に配当し、次の如く委しく釈されてある。その要を述べてみたい。

不思議智とは、是れ成所作智という。此の智は能く不思議の事を作す。一念に名を称すれば、永く多劫の重罪を滅ばす。十念の徳を念すれば、能く界外の勝報に生ず。是の如き等の事、下智の測るところに非ず。この故に、名づけて不思議智となす。

不可称智とは、是れ妙觀察智という。此の智は不可称境を観察す。謂く、一切法はみな幻夢の如し、有に非ず、無に非ず、離言絶慮、言を逐う者は能く称量するところに非ず、この故に、名づけて不可称智と為す。

大乘広智とは、是れ平等性智という。此の智は広く度するゆへ小乗に向せず。此の同体の智力、普く無辺の有情を載せるをもって、皆同じく無上菩提に至らしむ。この故に名づけて大乘広智となす。

無等無倫最上勝智とは、正しく是れ、如来、大円鏡智という。始めて本識を転じて方に心原に帰す。一切の種鏡をして円照せざるなし。是の故に大円鏡智と為す。此の一智の中に五殊勝あり、解脱身の如し、二乗同得す。是の如くの鏡智、正しく是れ法身、大円鏡智は唯仏の頓証であつて、前の

三智（不思議智・不可称智・大乘広智）にこえ過ぎる故に、名づけて無等無倫最上勝智と名づくを積されてある。

次に、四種の疑惑の相を明して、一の性、質直に非ず。邪聴我慢、道心の薄き人あるが如きは、四智（不思議智・不可称智・大乘広智・無等無倫最上勝智）を了せず、而して、四疑を起すといつて、次に四疑についての相を詳かに説明してある。いま、その四疑についての意味内容を要約すれば、次の如くである。

第一疑は、成作事智所作之事を疑うといつて、經に十念に念佛して。彼國に生を得ることを聞くといえども、これを了せざるによつて疑を生ず。但十念をもつて能く諸罪を滅し、便ち彼處に生じ、正定聚に入り永く三塗を離る。畢竟して退せざることを得んや。若し、信を生ぜんと欲せば、應に事を以て沈べるべし。といつて、譬を挙げて、

譬如千年積薪其高百里 豆計火燒一日都盡 可レ言ニ千年之積薪如何一日盡耶 又如下辭者（いざり。兩足の立たない人）自力動行 要選多日至ニ一由旬ニ 若寄ニ他船ニ因ニ風帆勢ニ一日之間能至千里ニ 可レ言辭者之身云何一日至千里ニ耶 世間船師之身尚作ニ如是絶慮之事ニ 何況如来法王之勢 而不ニ能作ニ不思議事ニ耶 是為對治第一疑ニ（大正藏經三十七卷一三〇頁）

と結んである。

第二疑は、謂う妙觀察智、所觀の境を疑うなりといつて、

經中に仏智を歎じて云うが如し、妙に諸法を觀察して、有に非ず、無に非ず、二辺を遠離して而も中に著せずことを了せざるによつて疑を生ず。今現に物を稱るの時を見るに、物重ければ即ち低く、物輕ければ必ず挙る。若し輕くして挙げざれば、重くして低らずという。是の如く説くは言あつて義なし等といつて、

第一甚深難見法者 所謂諸法自性 皆絶戲論過言語道 然由言説為依止故 方乃可レ取可レ觀可レ覺 是故諸法甚深難見是為對治第二疑ニ也（大正藏經三十七卷一二二頁）と結ばれてある。

第三疑は、謂う平等性智は等しく齊度の意を疑うといつて、經に一切衆生悉く皆心あり、凡そ心ある者は、當に菩提を得べしと説くを聞くが如きことを了せざるに由るが故に、疑を生ず等といつて、

應信平等性智 無所不度 非有有限 所以安立大乘広智 是為對治第三疑ニ也（同・一三二頁）と結ぶのである。

第四疑は、大円鏡智は遍く一切の鏡を照らす義を疑う。云何が疑を生ずる。謂く是の言を作すは、虚空無辺故に世界亦無辺である。世界無辺故に衆生亦無辺である。衆生無辺故、心行差別、根欲の性等、皆是れ辺際なし。云何が此において能く盡知することを得るや等と、『起信論』に云うが如しと

いって、

一切境界 本来一心 離於想念 以衆生妄見 境界 故心有分齊 以妄起想念 不称法性 故不能決了 諸仏如来離於見相 無所不遍 心真実故 即是諸法之性 自体顯照 一切妄法 有大智用無量方便 隨諸衆生所應得解 悉能開示一切法義 是故得名一切種智 是為無等無倫最上勝智 無所見 故無所不見 如是对治第四疑也 (同・一三一頁) と説かれてある。

而して、最後に以上の四疑をまとめて、
若人決疑 如是四疑 雖生彼国而在边地 如其有
雖未明解 如前所説四智之境 而能自謙 心眼未開 仰惟
如来 一向伏信 如是等人 隨其行品 往生彼土 不在边地 生著边者 別是一類 非九品攝 是故不應妄生疑惑 也 (同・一三一頁)
等と結ばれてある。

以上、元曉師の説を要約するならば、五智について総別を分ける中、別して四智については、不思議智を成所作智、不可称智を妙觀察智、大乘広智を平等性智、無等無倫最上勝智を大円鏡智にそれぞれ配当されてあることと、觀經の九品の浄土へは、此の疑城(边地)を撰めぬという不撰の義を説かれることである。

三

新羅浄土教家の大經「胎化段」觀(渡 辺)

憬興師(620~700頃)は、『無量寿經』(竺法護訳とする)巻下の「彼国人民有胎生者汝復見不對曰已見其胎生者所処宮殿或百由旬或五百由旬各於其中受諸快樂如切利天上亦皆自然」(明見胎生者)等の經文を『無量寿經連義述文贊』(大正藏經三十七卷・淨金五卷)に釈して、百由旬者即下輩疑仏所生之宮 五百由旬者即中輩疑智所止之宮(大正藏經三十七卷一六九頁)等と述べて、「所処宮殿」ということを中・下輩にかけて解釈されてある。

このことは、つづいて「帛謙經若中若下皆云三千里城」蓋是略舉不盡之言」等と述べられてある。すなわち、『無量清淨平等覺經』(帛延訳とする)(卷三)正宗分の往生の因果を明す中の三輩(最上の第一輩・第二の中輩・第三輩)往生を説くところと、『大阿弥陀經』(支謙訳とする)(巻下)のはじめ、往生の因果を明す中の三輩(最上の第一輩・第二の中輩・第三輩)往生を説くところによれば、兩經(大正藏經十二卷・覺經(二九二頁)・大阿(三一〇頁))ともに、第二の中輩のところと、第三輩のところには、二千里ある七宝の城中に七宝の水池の蓮華、七宝の舍宅あり、五百歳の間、その城中に止まるというのであるから、此の「所処宮殿」というを、無量寿經の中下輩に當てて、先に挙げた釈の如く「百由旬者即下輩疑仏所生之宮 五百由旬者即中輩疑智所止之宮」と釈し、

新羅淨土教家の大経「胎化段」観（渡 刃）

仏智疑う所由によつて、疑城胎宮に生じ止まること五百歳と積するのである。

また、憬興師は、「積尊の重誨」を説く中、「汝等宜^ニ各精進求^ニ心所願^一」無^レ得^下疑惑中悔自^ニ為^ニ過咎^一生^ニ彼^レ辺地七宝宮殿^一五百歳中受^中諸厄^也」等の経文を「勸^レ捨^ニ疑惑^一也」と分科し、先の帛謙本中の中・下輩を挙げてのち、

此中言^ニ七宝宮殿^一者蓋彼城内宝舍宅也 彼城受樂此経曰^レ如^ニ切利天^一而受^ニ諸厄^一者不^レ能^レ見^ニ聞^ニ三宝^一故（同・一六六頁）

等と述べられる積は、仏智疑惑を捨ててことを勤めるとみられるのであつて、このことを次の「弥勒白^レ仏言^ニ受^ニ仏重誨^一」專精修学如^レ教奉行 不^ニ敢有^レ疑^一」の経文については、「弥勒の領解」と分科して、その不疑について「不疑者領^レ勸^ニ捨^一疑^ニ申^ニ自不疑^一」（同・一六六頁）と釈して、弥勒菩薩の領解とともに、自らも疑わず信念を告白されてあることは注目すべきである。

次に、憬興師は『無量寿経』巻下のはじめの「経曰 仏告阿難至^ニ有其三輩^一（凡有^ニ三輩^一）」（同・一五八頁）の経意について、「申^ニ往生因^一令^ニ人修^ニ生有^一」と科して、「此初総標也」といって諸説を挙げて、三輩と九品の撰・不撰について委しく論じ批判をされてある。その中、

有説（元曉師）不^レ決^ニ四疑^一雖^ニ生^ニ彼国^一而在^ニ辺地^一別是一類非^ニ九品撰^一 是故不^レ応^ニ妄生^ニ疑惑^一」（同・一五八頁）

という元曉師の説を挙げて、

此亦不^レ然 二經所^レ說中下之属所止宝城既五百 応^下如^ニ此經疑智凡夫所在宝宮殿^一亦是^ニ辺地^一故（同・一五八頁）

等と批判し、さらに有説等と他の諸説を挙げてのち、憬興師は、

若三輩若九品皆無^ニ寛狹^一撰^ニ往生盡^一（同・一五九頁）

と述べられることは、観経に説かれる九品に此の疑城を撰むるという三輩九品相撰するとの義であつて、元曉師の如く、観経の九品の浄土へこの無量寿経に説かれる疑城を撰めぬという不撰の義に対して、憬興師は、無量清浄平等覚経・大阿弥陀経の三輩段を証拠として、三輩九品相撰の義を立てられたのである。

このことは、親鸞聖人が主著『教行信証文類』の第六巻化身土文類のはじめに、

體顯^ニ化身土^一者 仏者如^ニ無量寿仏觀經^一說^ニ真身觀^ニ仏是也^一 土者觀經^ニ淨土是也^一（真聖全（一）四三頁）

と述べて、観経の九品の浄土を化土と定め、次いで、

亦如^ニ大無量寿經^一說^ニ即疑城胎宮是也^一

と述べてある。此の疑城へあらゆる化土を撰めるというのが親鸞聖人の説であつて、さらに、その釈意の要義を窺うならば、観経顯説の浄土は化土にあつて化土を見る相であり、無量寿経の疑城胎宮は報土から化土を見る相であり、或は、た

だ一含華の相、或は、自然七宝或は七宝華中というものの、皆報土から見る相である等の親鸞聖人の説は、憬興師の説を相承されたものと窺われるのである。

次に、憬興師は、その胎生の因については、疑網・疑をその所由とすることを委しく釈し、五智の釈をされてある。

弥陀弘誓ありと雖も、衆生万品、頗る能く十方天人を接引して彼の国に生ぜしむるを疑う故に不了仏智という弥陀既に一真法界を証す。徳円かに諸患悉く尽さざるなし、当際を尽して竭つゝくす。本願に称(かな)うて迎接する故、有縁の衆生皆彼土に生ず。疑網を以て懷(おもひ)を経(い)となむべからずとなり。

大円鏡智を不思議智と名ずく、有(また)、經に善惡罪福重き者先ず引くと説くを聞く。即ち弥陀仏名を称念すれば必ず彼土に生まれる。恒に諸惡を作し、惡必ず深重にして、応に十念相統の微善能く諸罪を滅ばすべからずと、而して、彼(かしこ)に往生して正定聚に入り畢りて退転せずと言うを疑う故に、不思議智を了せずという。不思議智には大威力あり、思量境に非ず故に、汝聞かざるや。

一面の鏡には像現ぜざるは無し、詎(なん)ぞ一智力、諸罪障を消すを疑うや。又、毫毛万斤も少火に能く焚(もや)すが如し。故に十念称仏して念ずれば、別して能く八十億劫の生死の罪を除き浄土に往生す。何ぞ怪しむべきことあらんや。

平等性智を不可称智と名ずく。有(また)、仏智、法において懸絶するを聞いて疑を懷く、而して言(いう)ころは、名必ず相得

す、不覺に待して覺と名ずく、何ぞ懸絶有らんや。念ずれば多福を獲る。今此の疑いを釈せんために、仏に不可称智あることを顯わす。平等性智は二空の理を証し、境智平等、称説を玄絶して、名を以て名を遣わして玄旨を詮わす。旨(おもひき)を悟る者は言を亡し、境既(つ)して称すべからずの智を不可称という。不可称の故に念ずる者福多し、此れに由つて疑網を懷くことあるべからず。

妙觀察智を大乘広智と名ずく。有(また)、念仏すれば皆往生を得る。言(いう)ころは、過現の諸仏復無量と雖も、生(衆生)を済うて尽さず、一仏能く衆生を度し尽くせば、応に更に余仏の生を化することあるべからず。如何が、弥陀仏を念ずる者皆彼土に生ずと聞いて疑を起こす。故に、大乘広智を了せずという。妙觀察智は常に智慧を含んで、諸の有縁をして運載し涅槃に入らしめざるは無し。但し、諸の衆生、各々所屬(たのむところ)あり、屬(たの)む者尽すと雖も、不屬のもの猶ある故、更に余仏出世の化益あり、此れに由つて、念仏すれば皆浄土に生ずる意效(こ)にあるなり。

成所作(智)を無等無倫最上勝智と名ずく。有(また)、如来十四不可記事に答えずを聞いて便ち仏を疑う。遍く一切諸法を知る能わず、既(つ)くに勝用無し、念ずれば何の福ありや、故に無等倫智を了せずという。成所作智遍く六塵に緣じて凡夫に同ぜず、故に無等という。万境に達すと雖も常に妙定あり、二乗の入出不同に如(し)くに非ず故に無倫という。二障都べて尽き、三業

新羅淨土教家の大経「胎化段」観（渡 辺）

化を發して四記論^{（一）}を作し、諸菩薩の能為するところに非ざるが故に最上勝という。―（乃至）―故に之を念する者福定少きに非ず、此に由つて仏智を疑い彼國に生ずと雖も、辺地に在りて聖化を被らずの事、胎生の若（こ）し、宜しく之を捨つ応しと。（同・一六九頁）

等と長々と釈されて、胎生の因は仏智を疑うを、その因とするのであるから「宜しく之を捨つ応し」と結ばれるのである。

以上、元曉・憬興兩師の無量寿經の五智に就いての所顯の配列をするならば、次の如く相違することが知られるのである。

（仏智）	（元曉）	（憬興）
（不思議智）	——	成所作智 大円鏡智
（不可称智）	——	妙觀察智 平等性智
（大乘広智）	——	平等性智 妙觀察智
（無等無倫最上勝智）	——	大円鏡智 成所作智

惟うに、『無量寿經』に説かれる五智は、阿弥陀仏についての五智であるから、唯識家の所説である転識得智の四智心品（大円鏡智相应心品（第八識）・平等性智相应心品（第七識）

・妙觀察智相应心品（第六識）・成所作智相应心品（前五識）に配当するということは、無量寿經の阿弥陀仏の五智の説明としては経意に契わないではなからうかと思われるのである。

（一）無量寿如来会には仏智・普遍智・不思議智・無等智・威徳智・广大智の六智とする（元曉・憬興師ともに所覽に非ず）。五智については『略論安樂淨土義』（曇鸞）（？）に詳釈されてある。

△キーワード▽ 新羅淨土教家（元曉と憬興）、三輩九品、五智、胎化段

（龍谷大学大学院修了）

新刊紹介

中村 元 福永 光司
田村 芳朗 今野 達 編

『岩波仏教辞典』

四六判・定価五、八〇〇円
一〇〇〇頁・特価五、〇〇〇円
岩波書店・平成元年十二月五日刊